

化学療法を受ける女性生殖器がん患者の 脱毛に対する受けとめ方の変化

今泉 郷子¹⁾ 村山 康子²⁾ 柴田美香子²⁾ 黒島久美子²⁾
三浦美奈子¹⁾ 西崎 未和¹⁾

要 旨

本研究の目的は、化学療法を受ける女性生殖器がん患者の脱毛に対する受けとめ方の変化を明らかにすることである。質的帰納的デザインを採用し、東京都内A総合病院の産婦人科病棟において化学療法を受けた女性生殖器がん患者3名を対象に、半構成的インタビューにて情報収集を行った。その結果、脱毛に対する受けとめ方として、ステージ1. ああなりたくない、ステージ2. とうとうきたー見られたくない、ステージ3. まあいいわ、ステージ4. 外の人には知られたくない、ステージ5. もう安心 という5つのステージが、明らかになった。脱毛による容姿の変化や、がん患者になることを受け入れベテランとしての成長を促すために、対象者に寄り添うという援助の必要性が示唆された。

キーワード：がん看護、脱毛、ボディ・イメージ、化学療法

1. はじめに

がんの治療方法のひとつである化学療法は、今日めざましい治療成績をあげているが、その一方で副作用の影響も計り知れないものがある。副作用として注目されるものに、嘔気・嘔吐などの消化器症状、骨髄抑制、脱毛などがある。消化器症状や骨髄抑制は、対象者の生命に直接影響することもあり、治療のための薬剤が数多く開発され、その効果も認められてきている。

直接生命に影響を与えることは少ないが、患者にとって苦痛の強い副作用として、脱毛があげられる。荒川¹⁾は、化学療法を受ける患者の副作用に対する程度と頻度を調査した結果、程度の高い副作用として脱毛があることを明らかにし、脱毛による、患者への精神的なダメージが強いことを示唆している。また、荒川ら²⁾は、化学療法の副作用に関する看護研究の動向を明らかにする研究の中で、脱毛に関する研究は、件数は多くはないが、常に存在するテーマであると述べている。看護者にとっても脱毛に対するケアは、関心はあるものの、解決策が見いだせずにいることが伺えた。

女性生殖器がん患者の場合、進行の程度によっては、手術療法などによる女性臓器の喪失に加え、繰り返される化学療法によって、著明な脱毛を体験することがあり、内的なボディ・イメージの変化だけでなく、外的な変化も生じ、二重の苦痛を体験することが予測される。

脱毛に関する先行研究として、工藤ら³⁾の、アイスクャップを用いた脱毛予防方法の検討や、新井ら⁴⁾の、脱毛によるボディ・イメージの変化を統計的に明らかにしたものなどがある。また、遠藤ら⁵⁾は、卵巣癌患者の化学療法克服過程を説明する研究で、対象者が、脱毛などの副作用に伴う自己イメージの変化を受け入れられず、もとの自分に戻りたいという思いを抱いていることを明らかにした。しかし、脱毛そのものをどのように受けとめていったのか、その変化に関する言及はみられていない。

鳥越ら⁶⁾の研究から、脱毛への対処行動とその後の治療への取り組みとの関連が示されたように、がんの治療に伴う出来事の受けとめ方は、その後のがんとともに生きる生活に、影響を及ぼすことが予測される。

そこで、本研究では、化学療法を受ける女性生殖器がん患者が、脱毛をどのように受けとめ、それがどのように変化していったのかを明らかにすること

1) 川崎市立看護短期大学

2) 公立学校共済組合 関東中央病院

で、脱毛という苦痛な出来事が、がんとともに生きる生活において、意味ある体験となれるような援助を導き出す示唆を得たいと考えた。

2. 研究目的

化学療法を受ける女性生殖器がん患者の脱毛に対する受けとめ方の変化を明らかにする。

3. 研究方法

研究デザイン

対象者の思いをありのままとらえることを目的とするため、質的帰納的デザインとする。

研究期間

2000年7月～10月。

対象者

東京都内A総合病院の産婦人科病棟において化学療法を受けた女性生殖器がん患者で、かつ以下の要件を満たすものを対象者として選択した。

- ・初めて化学療法を経験したもの。
- ・受けた化学療法がCAP療法（シクロホスファミド＋アドリアマイシン＋シスプラチン）であったもの。
- ・退院後1年以内のもの。

データ収集方法

半構成的インタビューによって、データ収集を行った。インタビューの所要時間は、約60分／回で、対象者の了解を得た上でカセットテープに録音した。インタビュー内容は、化学療法を繰り返す中で生じた脱毛に対して感じたこと、考えたこと、そのことにどのように向き合っていたのかを自由に語っていただくというものであった。研究者は、対象者の回答を誘導しないよう、また自由に語れるような雰囲気作りに心がけた。

データ分析

録音したインタビュー内容を、逐語録に書き起こし、脱毛に関する思いを抽出した。それらを化学療法開始前－脱毛開始－髪の毛が生えかわるまでの時間的な経過に沿いながら、類似するものをまとめカテゴリー化した。カテゴリーには、対象者の脱毛に対する気持ちを表す言葉をカテゴリー名として命名した。データの信頼性を高めるために、メンバー間で合意が得られるまで分析を繰り返した。

倫理的考慮

対象者には、研究参加承諾書を用いて協力依頼を

行った。研究参加承諾書には、研究の趣旨とともに、依頼を断っても治療上の不利益が生じないことを明記し、自由意志で参加できるよう配慮した。また、参加した場合、秘密は保持されること、途中で参加を取りやめても治療上の不利益は生じないことを保障したうえで、研究参加への同意を得た。

4. 結果

対象者概要

対象者は3名で、年齢は53才から59才、診断名は3名とも子宮体がんであった。全員が化学療法の前に手術療法を受けており、子宮および卵巣は摘出され、対象者らもそのことを告知されていた。

脱毛に対する受けとめ方の変化

脱毛に対する受けとめ方として、ステージ1. ああなりたくない、ステージ2. とうとうきたー見られたくない、ステージ3. まあいいわ、ステージ4. 外の人には知られたくない、ステージ5. もう安心という、5つのステージに分類された。以下、それぞれのステージについて報告する。

ステージ1. ああなりたくない

このステージは、がんと診断され、手術や化学療法などの治療方法が決まりその副作用である脱毛の説明を受けた時、入院時に髪の毛のない同室者の姿に直面した時点での思いを表している。対象者らは、なってしまったものは仕方ないとか、自覚症状がありつつも放置していたのだから仕方ないと、がんになってしまったことや、治療を受けること自体は受け入れつつあるようであった。しかし、その治療のために、脱毛してしまうことへの戸惑いや拒絶感が表された。

- ・（同室者の）髪の毛のない姿を見ただけでショックを受けましたよね。とても重症に見えたんです、私には。ああいう風にはなりたくないなあって思いました。
- ・脱毛があることは、ずっとひっかかっていた。気持ちが悪いことはそのとき我慢すればいいかもしれないけど、髪の毛はね。3ヶ月たてば生えてくるといわれても、その間どうしたらいいんだろうと思いました。
- ・私は、（脱毛後に）バンダナを巻くのが嫌なの。やはりバンダナをしていると何か治療をしている人だっていうことがわかるじゃないですか。

- 私は、カツラをすぐに準備したんです。今までの自分のヘアスタイルと同じようなものを準備しました。カツラではないと他の人に思わせたかったんだと思います。

彼女らにとって脱毛という体験は、容姿の変化が生じるだけでなく、がん患者になるということをも意味していたようであった。がんという病気になったことを受け入れつつも、自分が、がん患者になるということへの抵抗を感じているように思われた。

対象者の中には、このような不安や恐怖が解決されないままに化学療法が開始されたものや、自分でカツラを買うことを決意し、いざとなったらそれをかぶればよい、と自分に言い聞かせることで治療に取り組めるように対処していったものもいた。

ステージ2. とうとうきた一見られたくない

2回目の化学療法が行われる前後の時期に、対象者のほとんどは脱毛が始まっていた。彼女らは、初めての治療の体験の中で、激しい嘔気や嘔吐などの副作用を乗り越え、やっと一息ついたところでもあった。対象者らは、その急激な髪の毛の抜け方に強い衝撃を感じ、その時がとうとうきたということを実感すると同時に、抜け落ちていく髪の毛への愛着も感じていた。

- 頭の皮膚がぴりぴりする感じがしたんです。そしたら髪の毛が抜けだしたんです。お風呂で髪の毛を洗ったらばさばさってぬけてしまって。あーとうとうきたなあ、もう髪の毛はなくなっちゃうんだなあって。
- シャンプーをしていたらばさって抜けてきたんです。ショックでした。幽霊の何とかじゃないけど、怖かったです。それはそれはショックでした。
- ベッドサイドに、わあーと思うぐらいに髪の毛が落ちていて、ああ嫌だ、これだあって思いました。
- 50年間連れ添ってきた髪の毛ですからね。ご苦労様ってなでてあげました。

対象者らは、同病者にうち明けたり、看護者に思い切り感情を表出することで、その衝撃を払いのけようとしていた。しかし、脱毛は一度で終了するのではなく、その後しばらくと抜け続けるため、ベッドサイドに髪の毛が散らかり、自分の周囲が汚れることで不快な気分を味わう、洗髪後に抜けた髪が絡

まり、解きほぐすのに苦労するという体験が続いていた。

このように髪の毛が抜け続ける日々の中で、対象者らは、常に髪の毛を気にしなくてはならない生活に不自由さを感じていたようであった。彼女らは、眠るときもバンダナを巻き、脱毛した姿を看護者にさえも見られることを拒んでいた。化学療法のための点滴が行われているときも、嘔吐で苦しんでいるときもバンダナがはずれてしまうことを気にしているものもいた。

- 髪の毛がないっていうのはつらいですね。すごく嫌ですね。常に髪の毛のことを気にしなくてはいけないのですから。
- 夜中でもいつもバンダナをかぶっていました。うっとおしいんですけど、やっぱりかぶらないでいた方がいいんでしょうけど、何となくね。
- あんまりなところを見られたくないし、見せない方がいいんじゃないかって思っていました。それに、自分もちゃんとしてなきゃね。

ステージ3. まあいいわ

3回目の化学療法が終了する頃になると、髪の毛の抜け落ちも減り、逆に、細く柔らかい髪の毛が生え始めてきたものもいた。このころになると、化学療法に対する自分なりのリズムができ、治療を受ける生活そのものの負担感も減ってきているようであった。このような徐々に落ち着きつつある状況の中で、対象者らは、ふとしたことで髪の毛の抜け落ちた姿を、他者に見られてしまうという体験をしていた。そして、見られてしまったことへの恥ずかしさを感じると同時に、これまで見られないために、必死にがんばっていたことへのとらわれを解きほぐされるような体験をしていた。

- 看護婦さんにも見られたくなかったんだけどね。でも、回を重ねるごとに何となく自分のほうも疲れてきちゃってね。まあ、いいわって思うようになったの。慣れてきたのかもしれないけど。
- バンダナを巻いていなかったら、急に人が来て見られちゃったんですよ。あっ、見られちゃったって思ったんだけど、まあ、いいわって思ったんです。

とはいえ、見られないですむなら見られたくない

という思いは、常に持ち続けていたようで、普段はバンダナなどを巻いて過ごしてはいたが、以前のような“必死さ”は、少なくなっていったようであった。

ステージ4．外（そと）の人には知られたくない

対象者らは、ステージ3で、髪の毛が抜け落ちてしまった自分の姿の変化を受け入れつつあるようにみえた。しかし、外泊のために病院を出て、外の人々、がん患者ではない人々と接しなければならない状況に遭遇した時、自分の髪の毛がなくなっていることを知られたくない、という思いを感じたようであった。“まあ、いいわ”と思えたのは、それはあくまでも、病院という囲まれた、自分と同じがん患者がいる世界においてであった。がん患者としてのつらい体験を知らない健康な人々に囲まれたとき、自分はもう以前の自分ではなく、彼らとは違った人間であるということを意識していた。そのため、自分が彼らとは違う存在であることを、知られたくないという思いを感じたようであった。

- やっぱり見られたくないし、見せたくもない。
- 外の人にはほっといてほしい。同じ体験をしている人に髪の毛のことを聞かれても素直に答えられると思う。でも違う人に「ああ、がんのために髪の毛抜けたのね」なんていわれたら、すごい嫌な気分になる。
- 外来にバンダナして行ったら、小さい子どもたちが、「あの人たち髪の毛ないんだよ」とはなしているのが聞こえてきてしまってねえ。表の方から見ると異様な感じがしますよね。知らない人を見るとびっくりしますよね。
- カツラをつけたときは視線が下を向いてしまうんです。堂々と歩けない。なんかこう恥ずかしくて。

ステージ5．もう安心

対象者らは、知られたくないという思いから、カツラを装着するなどの工夫をしていたが、徐々に髪の毛が生え始め、自分の髪の毛だけでも、普通に見えるようになったとき、やっと元に戻りつつある自分を確認でき、安心感を得ていたようであった。

- 髪の毛がきれいに生えそろってきたので、ああ、これでもう安心っていう感じがしましたね。
- たまたま本を見たら、とても短いショートカツ

トが載っていて、これならもう（今の自分の髪の毛の長さでも）大丈夫だって思って、カツラをとったんです。

5．考 察

脱毛に対する受けとめ方の変化について

対象者たちの脱毛に対する受けとめ方の変化として、ステージ1：ああなりたくない、ステージ2：とうとうきたー見られたくない、ステージ3：まあいいわ、ステージ4：外のひとには知られたくない、ステージ5：もう安心、という5つのステージが明らかになった。

この全プロセスを通じて、対象者らは、脱毛という容姿の変化を受け入れると同時に、自分が、がん患者であるということも受け入れていく姿が見いだせた。対象者らは、がんになってしまったことや、化学療法を受けなければならないことは、理解していた。しかし、そのことと、自分ががん患者になるということは別のこと、としてとらえられていたようであった。

対象者らは、がん＝死というイメージはないまでも、その治療のすさまじさ、治療による身体への影響の強さについては、様々な予備知識を持っていた。そのため、生き続けることはできる、しかし、以前とは違う弱々しい哀れな人間になってしまうと感じていたようであった。そして、脱毛＝がん患者＝哀れな人という構図が成立し、“ああなりたくない”という思いを抱く結果になったと考えられる。

今泉ら⁷⁾は、化学療法を受ける胃がん患者を対象に行った研究の中で、哀れまれたくないという思いが自分自身を窮地に追い込んでいく様を明らかにした。本研究でも類似の結果を得た。また、Mave⁸⁾は、その人が自分をどう見て、どう感じるかがその人の精神的な健康や、その生き方に影響を与えることは間違いないと述べている。対象者らにとって、脱毛という、がん患者特有の姿になることは、自分自身を哀れむべき悲しい存在としてみることであり、同時に自分を追いつめる結果になったと考えられる。

化学療法を1－2回実施し、嘔吐などによって痩せ衰えてしまった自分に気づくころ、脱毛が始まることで、“とうとうきた”、ついにがん患者になってしまった、そんな自分を受け入れたくないという思いから“見られたくない”と感じたと考えられる。

しかし、対象者らは、その耐え難い事実を、“まあ、いいわ”と受け入れていくという変化を見せていた。

遠藤ら⁹⁾は、卵巣がん患者の化学療法克服過程を明らかにする研究の中で、対象者たちが、不確かさの中にありつつも化学療法のベテランとなり、心の動揺を抑える耐性を身につけていく様を見いだした。本研究の対象者らも、同様に、がん患者となってしまう自分を悲しみつつも、その動揺を抑え、遠藤らのいうベテランへの道をたどり始めたのではないかと考えられた。しかし、本研究の対象者らは、外泊・退院という病院の外の世界に出たとき、自分はがん患者であるということを再度認識させられ、動揺を生じていた。ベテランになったとはいえ、外の人には見られたくない、“まあいいわ”と思えたのは、あくまでも病院という限られた世界でのことであった。そして日常の生活に戻るにしたがい、がんとともに生きることへの自信を持ち、“もう安心”と、さらなるベテランへと変化していったと考えられた。

Newman¹⁰⁾は、苦悩は我々をより高いレベルの意識への拡張を促すと述べているように、対象者が感じる動揺は、ただ彼女らを苦しめるだけのものではなく、がんとともに生きるベテランへの成長を助ける機会となっていると考えられる。

看護への示唆

脱毛は、容姿の変化だけではなく、がん患者となることを象徴していた。また、本研究の対象者は、女性生殖器がんで、外科的治療のために女性生殖器の喪失も経験していることから、2重3重の喪失を体験していると考えられる。その上で体験する脱毛は、対象者自身の存在を脅かす出来事であったことが推測される。しかし、このような驚異的な出来事にあっても、彼女らはそれに向き合い受け入れることで、がんとともに生きるベテランへと成長していくことが明らかにされた。特に、強い恐怖とともに“とうとうきたー見られたくない”と感じていた時期で、対象者たちは周囲のサポートによってその窮地の状況を乗り越えようとしていることがわかる。あるものは同病者と語り合い、あるものは看護者に

感情を表現するなど、様々な形が見られた。

Newman¹¹⁾は、古い規則から自らを開放し、新しい規則を見つけるのはより難しい。しかし、愛情とケアリングのこもった援助があれば新しい可能性に心を開くのが容易になる、と述べている。対象者たちも様々な形で他者と関わることが、自分のありのままの姿に関心を寄せられる体験となり、その窮地の状況に耐える力を得て、変化へと続くことができたのではないだろうか。

以上のことから、看護者は、脱毛をある限られた時期だけのこととしてとらえ、“再度生えてくる”ということを安易に伝えるだけではなく、対象者がそのことをどう感じ、どのように受けとめようとしているのかを受けとめつつ、そばに寄り添うことが重要であると考えられた。

研究の限界

本研究は、ある特定施設で治療を受けている女性生殖器がん患者であり、対象者も3名と少なく、一般化へはさらなる追試が必要である。

6. 結 語

本研究の結果から、化学療法を受ける女性生殖器がん患者の脱毛に対する受けとめ方として以下のステージが明らかになった。

ステージ1. ああなりたくない

ステージ2. とうとうきたー見られたくない

ステージ3. まあいいわ

ステージ4. 外の人には知られたくない

ステージ5. もう安心

そして、看護への示唆として、脱毛による容姿の変化や、がん患者になることを受け入れ、ベテランとしての成長を促すために、対象者に寄り添うという援助の必要性が示された。

謝 辞

治療のため通院されているなか、快くインタビューにお答えいただきました対象者の方々に、深く感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 荒川唱子：癌化学療法による副作用と選択的要因との関係，日本看護科学会誌，16（3），21-29，1996.
- 2) 荒川唱子，大藺七重，他：がん化学療法の副作用に関する看護研究の動向，臨床看護研究の進歩，11，30-37，2000.
- 3) 工藤玲子，大橋節子，他：キャップ別、頭部皮膚温の経時的変化，第29回日本看護学会論文集 看護総合，197-199，

1998.

- 4) 新井治子, 二渡玉江, 他: 化学療法による脱毛患者のボディイメージ, 第21回日本看護学会集録 看護総合, 171-173, 1990.
- 5) 遠藤恵美子, 荷福ますみ, 他: 卵巣癌患者の化学療法克服過程, 看護実践の科学, 2, 86-96, 1993.
- 6) 鳥越るみ子, 久保幸子, 他: 化学療法による脱毛への対処行動がその後の治療への取り組みに与える影響, 第29回日本看護学会論文集 成人看護Ⅱ, 132-134, 1998.
- 7) 今泉郷子, 遠藤恵美子: 入退院を繰り返しながら化学療法を受ける胃癌患者の遭遇する問題を乗り越える体験としてのプロセス, 日本がん看護学会誌, 13(1), 53-64, 2000.
- 8) Mave Salter (前川厚子訳): ボディ・イメージと看護, 4, 医学書院, 1992.
- 9) 遠藤恵美子, 荷福ますみ, 他: 前掲5), 86-96.
- 10) Newman, M. A. (手島恵訳): マーガレットニューマン看護論, 124, 医学書院, 1995.
- 11) Newman, M. A.: 前掲10), 57.